

翻訳は「何」を訳すか

藤 本 幸 伸

What is to be translated in translation?

FUJIMOTO Yukinobu

(Received September 24, 2010)

翻訳が訳す「何」かは、翻訳される書物の内容に決まっているはずで、外国語を学習し始めたばかりの初級者にでも分かることだと、一蹴されそうだ。確かに、翻訳が訳すのは書物の内容に決まっている。そこに一点の疑念もない、はずである。しかし、一つの原作を複数の訳者が訳した翻訳を読み比べると、書物の内容が何であるかに「一点の疑念もない」と言い切るには多少の勇気が必要であるようだ。

まず、簡単な文で訳文の振幅を確認しておこう。

Reserving judgements is a matter of infinite hope.¹⁾

教科書的に訳せば「判断を控えることは、無限の希望の問題だ」となる。このような短い文でも訳語に何を選ぶかとなると候補が幾つも浮かぶ。例えば、judgement は「判断」の他に「批判、意見、判決」の候補も考えられるし、hopeも動詞表現として読み解いたとき、「抱く」、「託す」、「叶える」のいずれの訳語で続けるのが相応しいか等々、この簡単な文でも可能な訳文の組み合わせは幾つもある。

ところでこの英文は、『グレート・ギャツビー』(*The Great Gatsby*, 1925)の冒頭、語り手ニック・キャラウェイ (Nick Carraway) が自己語りをする場面から抜き出した一文だ。前後の文脈はあとで詳しく見ることにして、2010年までに7人の訳者が翻訳してきているこの作品の当該箇所を確認しておきたい。²⁾

判断をさし控えることは、無限に希望を抱くことである。 (角川版)

断定的に割り切ってしまうぬということは、無限の希望を生むことになる。 (集英社版)

批判を控えるということは本来は無限の希望を失わないようにするということなのである。 (早川版)

(だから) 控えめに判断をくださいことこそ、無限の希望を残すというものだ。 (講談社版)

判断を保留するということは、無限の希望をのこすことになる。 (旺文社版)

判断を保留することは、無限に引き延ばされた希望を抱くことにほかならない。 (中公版)

判断を控えるというのは、どれだけ長い目で見てやれるかということだ。 (光文社版)

Reserving judgementsの部分は、講談社版を除いて全て「判断を控える」で同じような読み方をしているが、後半部分の (a matter of) infinite hopeは、光文社版を除いて、「希望」を「抱

く」のか、「生む」のか、「失わない」のか、「残す」のかで訳語に違いがある。では、どのように訳するのが相応しいのだろうか。ここで言う「希望」は、一体誰の「希望」だろうか。自分の場合なら、「抱く・生む・失わない」でもよいが、他人の場合は、「託す・抱かせる・叶えてもらう」になるだろう。また、「判断を控えること」が「希望を抱く・生む・失わない・残す」ことになるとは、一体どういう意味なのか。たった一文でもこのように翻訳の振幅は大きくなり、そもそも、この文を取り上げるほどの意義があるのか大いに疑問が生じる。そこで、まず、『グレート・ギャツビー』という作品で、語り手ニックはどのような役割を担っているのかを検討して、次に、この作品の冒頭を読解して「書物の内容」を見極め、最後に、翻訳が訳す「何」かを特定していきたい。

1. 語り手ニックは何者か

『グレート・ギャツビー』を解釈する上で、絶えずニック・キャラウェイという語り手の存在が問題となる。すなわち、語り手ニックは信頼できるかという問題に収束するといつてよい。作者F. スコット・フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald) は絶えずこの作品の構造が不安定であることを気にしていた。この作品構造の成否を決めるのがニックの存在だ。そのニックは、ある一夏の出来事を物語にする。その物語の中心がギャツビー (Gatsby) であり、そのギャツビーとは何者かを知らうとすれば、いや作品中のあらゆる出来事について知らうとすれば、まずニックとは何者かを知らねば何も分からない、そのような構造を『グレート・ギャツビー』は持つ。

この作品の構造を解き明かす手懸かりとして、冒頭のニックによる自己語りを重視する批評家が多い。ルス・プリゴジー (Ruth Prigozy) もその一人だが、そのプリゴジーをしてもこの冒頭は、一つの謎が次の謎を生み最後まで読んでも一向に解決されないといい、ニックの厄介さに手を焼いている (1998, xxiv)。ニックの言う a sense of the fundamental decencies (6) とは何か、東部から中西部へと戻ったニックはなぜ世界に be in uniform and at a sort of moral attention forever (6) して欲しいと望んだのか、最後まで an unaffected scorn (6) を抱いていたギャツビーの物語をなぜ書こうとしたのか等々、謎が多い。

ところで、このような作品批評の問題と翻訳とはどう関係するのだろうか。小説を翻訳する場合、人称を「僕」にするか、「私」とするのか、あるいは「俺」にするのかで、作品の雰囲気が大きく変わる。もし、ニックが気弱な若者であれば、「僕」が相応しいだろう。がさつな大男であれば、「俺」は問題ないとしても「わし」では年齢の特定が難しい。いけ好かない気取った人間であれば、「私」に落ち着くかもしれない。そもそもニックとはどのような価値観を持ちどのような性格の人間かを特定しておかなければ、翻訳しづらい。そこで少々長くなるが、『グレート・ギャツビー』を解釈する上でとても重要なニックの自己語りを読んでおくことにしよう。

ニックは、若い頃に父から与えられた忠告を反復することから物語を始める。“Whenever you feel like criticizing anyone, just remember that all the people in this world haven't had the advantages that you've had.” (5) が、その忠告だ。この文は文法構造が難解だと言うわけではなく、「他人を批判したくなったら、みんながおまえと同じ advantages を持っているわけではないことを思い出せ」くらいの意味であろう。advantages が何を指すのか、みんなが持っているわけではないとはどういうことかなど気になるところだが、とにかく続きを読んでみよう。

He didn't say any more but we've always been unusually communicative in a reserved way, and I understood that he meant a great deal more than that. In consequence I'm inclined to reserve all judgements, a habit that has opened up many curious natures to me and also made me the victim of not a few veteran bores. The abnormal mind is quick to detect and attach itself to this quality when it appears in a normal person, and so it came about that in college I was unjustly accused of being a politician, because I was privy to the secret griefs of wild, unknown men. Most of the confidences were unsought—frequently I have feigned sleep, preoccupation, or a hostile levity when I realized by some unmistakable sign that an intimate revelation was quivering on the horizon — for the intimate revelations of young men or at least the terms in which they express them are usually plagiaristic and marred by obvious suppressions. Reserving judgments is a matter of infinite hope. I am still a little afraid of missing something if I forget that, as my father snobbishly suggested, and I snobbishly repeat, a sense of the fundamental decencies is parcelled out unequally at birth. (5-6 強調は引用者)

どうやら父の忠告には、表層以上の意味が隠されているらしい。その隠された意味を理解したニックは、それ以降「一切の判断を控える」(reserve all judgements)ようになり、その結果、おかしな連中に目を付けられ、何処かで聞いたことのある言い回しや鬱屈した表現で語られる打ち明け話の付き合いをさせられ、挙げ句の果てには「策士だ」(a politician)と有り難くもない評判をいただく羽目になる。その後に最初に挙げた文(Reserving judgements is a matter of infinite hope.)がくる。

では、Reserving judgementsは具体的にはどういう行為のことなのだろうか。「他人を批判したくなったら、…を思い出せ」というのが父の忠告であった。「判断を控える」とは「他人を批判しないこと」の代替行為だ。そして、他人を批判することがないから、ニックのところにおかしな連中が期待を持ってやってくることになる(おかしな連中とは、many curious natures, not a few veteran bores, The abnormal mindのこと)。そうすると、infinite hopeを「抱いたり叶えてもらえる」と期待するのは、このおかしな連中だと分かる。しかし、この直ぐ後にニックがギャツビーを評価する箇所があって、そこで、最後までギャツビーに対してan unaffected scornを抱いていたにも拘わらず、ニックはギャツビーのan extraordinary gift for hope (6)に感心する。そうすると、このhopeという語は、おかしな連中の抱く甘えのようなhopeというマイナス・イメージだけではなくなり話はややこしい。いや、やはりこのhopeはニックにとってプラス・イメージの語なのだ。もし父の忠告に従っておかしな連中の相手ばかりをする羽目になるなら、ニックと雖もとっくの昔に「判断を控える」のをやめていたはずだ。そうではなく、如何におかしな連中のお相手をさせられることになったとしても、その中にギャツビーのように飛び抜けたhopeを持つ人間と出会う機会がある。ニックはおかしな連中の相手という代償を払ってもギャツビーが体現するhopeに得難い価値を認めているのだ。

では、このようなhopeとはどのようなhopeなのだろうか。ギャツビーには、どこかしら gorgeousなところ、つまり、some heightened sensitivity to the promises of lifeであり、a romantic readiness (6)があるという。平たく言えば、成功を掴む感度の良さとロマンチックな恋愛だ。ギャツビーは、この感度をフルに発揮して成功を掴み、5年前に破綻したデイ

ジー (Daisy) との恋愛を取り戻そうとする。そのデイジーへの想いは the colossal vitality of his illusion (101) とまで表現される。それは、巨万の富を手にしたギャツビーが、もう一度5年前に戻ってデイジーとの恋愛を最初からやり直せるという幻想だ。そして、このギャツビーの幻想を聴いているうちにニックは、“I was reminded of something — an elusive rhythm, a fragment of lost words, that I had heard somewhere a long time ago” (118) と、自分が既に失ってしまった何かを聞き取ったように思うのだ。ニックが価値を見出しギャツビーが体現する hope とは、失われてしまった過去をもう一度取り戻せるという途方もない hope のことだ。

そこまでして、取り戻したい失われた過去とは何だろうか。「人類最後にして最大の夢」 (the last and greatest of all human dreams) である「瑞々しい緑の新世界」 (a fresh, green breast of the new world) のアメリカ、そのアメリカが「年々遠ざかっていく狂騒の未来」 (the orgastic future that year by year recedes before us, 189) であったとしても、そのアメリカをギャツビーは信じた。そのギャツビーの死後、中西部に戻って自分が中西部人であることを改めて意識した (unutterably aware of our identity with this country) ニックにとって、東部は「歪み」 (a quality of distortion, 184) としか映らない。取り戻したい失われた過去とは、アメリカが瑞々しい緑のように秘めていた未来への信頼であった。

この作品の背景は、1920年代のアメリカ、空前絶後の繁栄の現実を経験し、その繁栄と引き替えに未来への信頼に対する敬意を失ってしまい、誰もが無責任になった時代だ。1919年には、アメリカは世界の金の38%を保有していた。1927年時点での人口と自動車保有数の比率を比べると、日本は総数41,000台で1,500人に1台、イタリアは14万台で300人に1台、ドイツは32万台で200人に1台、フランスは89万台で50人に1台、イギリスは102万台で40人に1台であるのに対し、アメリカは2,213万台で実に5人に1台の割合で自動車を所有していた。世界に先駆けて大量生産大量消費時代に突入し皆が繁栄を享受できた時代、理念やら道徳やらに関心を持つものはいなくなっていた (野村、197)。

時代の無責任の象徴とも言える出来事が禁酒法を巡って展開された。1920年にプロテスタント倫理を信奉する人々の念願であった禁酒法が施行されると、その法律をあざ笑うかのように密造酒が大量に生産消費され始める。1919年から1929年の間に、コーンシュガーの生産は6倍に膨れあがった。コーンシュガーの使用用途は限られているため、この数値は端的にウイスキー生産の増加を示していた。医師の処方箋があれば、どの薬局 (drugstore) でもアルコールを販売できたし、商用の蒸溜器は500ドルで取り付けできたし、1ガロン用の小さな蒸溜器ならわずか6、7ドルで個人でも購入できた。言わば、禁酒法施行後一斉にアメリカ全体が密造酒を製造し始めたと言ってよい (アレン、336)。

ギャングに限らず誰もが密造酒を手にすることができた時代、一体誰が法律で禁止されている密造酒製造にまともに反対できたろうか。このような無関心な態度のことを「判断を控える」ニックをして carelessness と言わしめ、“they (=Tom and Daisy) smashed up things and creatures and then retreated back into their money or their vast carelessness or whatever it was that kept them together, and kept other people clean up the mess they had made…” (187-8) と批判することになる。その典型がギャツビーの死に対する無関心として現れる。

At first I was surprised and confused; then, as he lay in his house and didn't move or breathe or speak hour upon hour it grew upon me that I was responsible, because no one else was interested — interested, I mean, with that intense personal interest to which

every one has some vague right at the end. (172 強調は引用者)

ニックは、ギャツビーの死に対して自ら引き受けた責任 (responsible) を、interest という語に言い換える。レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams) によると、この語はもともと「損失の埋め合わせ、権利や分け前を付与する」という法律・経済の用語であったのが「関心」という普通の意味に拡大して使われるようになったらしい (168-70 因みに、今の金融用語としての意味が登場してくるのは、金貸し (usury) を貶める法律が改正されて、金銭を使って利益を得ることが慣行として認められる16世紀)。³⁾ interest という語がもともと「分かち持つ」という意味を持つことを、ニューヨークの証券会社に勤め金融関係の勉強 (8-9) をしているニックが知らないはずはない。つまり、ニックは「分かち持つ」という本来の意味で interest という語を使い、皆がギャツビーの死を「分かち持つ」のが本来ではないか、と不満を漏らしているのだ。interest と responsible が同義であるニックにとって、ギャツビーの死に無関心である連中 (careless people, 187) はギャツビーが抱いていた hope を笑えないし、そもそもそれを「分かち持つ」資格もないのだ。

では、この hope を「分かち持つ」資格があるかないかの区別はどこにあるのだろうか。どういう根拠を持って、ニックは自分にはこの hope を「分かち持つ」資格があると考えてのだろうか。

ニックはプロゴルファーのジョーダン・ベーカー (Jordan Baker) が若い頃からゴルフの試合中に不正をしていたことを、“Dishonesty in a woman is a thing you never blame deeply — I was casually sorry, and then I forgot.” (63) と、女性蔑視と疑われても仕方ない言葉を口にした後、臆面もなく自分の長所を語る。

Everyone suspects himself of at least one of the cardinal virtues, and this is mine: I am one of the few honest people that I have ever known. (64)

ここで注目したいのは、ニックは honest つまり「自分に嘘をつかない」ことを誇りとしている点だ。⁴⁾ たとえ時代が浮かれ騒いでも、密造酒販売の違法性を意識すること、誰であれ人の死を分かち持ち看取ってやること、これらに対して「自分に嘘をつかない」ことをニックは何よりも誇りとする。無関心な連中にとってニックの「自分に嘘をつかない」態度は、厄介な詮索 (my provincial squeamishness) でしかない。そして、ギャツビーの死後、偶然ニューヨークで出会った無関心な連中の一人トムは、ニックにとって子供として映る。

I shook hands with him; it seemed silly not to, for I felt suddenly as though I were talking to a child. Then he went into the jewelry shop to buy a pearl necklace — or perhaps only a pair of cuff buttons — rid of my provincial squeamishness forever. (188 強調は引用者)

確かに、ギャツビーが抱く過去を取り戻せるという hope は、17歳の子供が抱く類のものだが、しかしギャツビーは最後までこの hope に忠実であった (104)。たとえ密造酒販売などで巨万の富を築いたギャツビーに最後まで unaffected scorn を持っていたとは言え、ニックとギャツビーはこの「自分に嘘をつかない」という cardinal virtues を分かち持つ。ギャツビーとは違い、

この「自分に嘘をつかない」という cardinal virtuesを持たない無関心なトムは、ニックにとって子供でしかないのだ。

では、自らを大人と位置づけるニックとトムの差はどこにあるのか。先に、『グレート・ギャツビー』冒頭のニックの自己語りを引用した。その引用したパラグラフの直後、ニックは“*And, after boasting this way of my tolerance, I come to the admission that it has a limit.*” (6)と、「判断を控える＝批判しないこと」ことを tolerance と言い換える。つまり、忍耐が大人の条件なのだ。自分のしたいようにして後始末は人任せという無関心な連中は子供であり、最後まで「自分に嘘をつかない」で他人に interest を持ち続けるのが大人だ。ニックが父から受け継いだ忠告を“*a sense of the fundamental decencies is parcelled out unequally at birth*”と言い換えるとき、その the fundamental decencies とは「自分に嘘をつかない」という cardinal virtues のことだったのだ。

この同じ文章でニックがそれとなく匂わせている物騒な発言も、やおら明快な像を結んでくる。アメリカは独立宣言の冒頭で、“*We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights*” (強調は引用者) と誇らしく理想的な国家主権者像を語っていた。ニックの発言の「物騒さ」は、独立宣言の平等観と fundamental decencies の不平等観とが表層的に衝突するところにある。だが、独立宣言のこの部分は、「機会の平等」と「結果の平等」という二種類に解釈される。いかにも不平等を是認していそうなニックの発言も、能力や品性の不平等を前提とした「機会の平等」の現れと考えれば、さほど「物騒」でもない。つまり、お互い能力の異なるものでも同じスタートラインに立つことは保証するという考え方で、結果的に不平等となっても構わないとするアメリカ的保守主義の発想だ。

このような能力や品性の不平等を前提とするから、ニックもその父も自分たちには備わりそうでないものもいる fundamental decencies を語る際、snobbishly という語を二度も反復して読者に自分たちの立場を暗示的に示しているのだ。

ここまで、少し長くなったが『グレート・ギャツビー』冒頭のニックの自己語りの意味を探ってきた。アメリカが未曾有の繁栄に沸き立ち、他人が何をしようと誰もが無関心でいた1920年代、他人よりも品性が備わる優越の自覚を持つものとして、アメリカの理念5) まで立ち返り、もう一度アメリカの道徳的な再生を期待したいと願うニック像が浮かび上がる。ニックが心底侮蔑しているにも拘わらずギャツビーに惹かれるのは、道徳的再生を願う真摯な気持ちがギャツビーの過去を取り戻せると真剣に信じる想いと重なるからだ。こう確認した上で、面倒な文章理解と翻訳との関わりを次に考えておこう。

2. 理解の表現としての翻訳

では、ここで改めて翻訳とは「理解の表現」であるとして、その理解が表現としてどのように現象するのかを考えておこう。まずは、『グレート・ギャツビー』冒頭からニックの人物像を捉える上で重要な表現がどのように翻訳されてきたかを見ておこう。

取り上げる表現は、上で詳しく意味を探ってきた hope とその言い換え表現、advantages とその言い換えである a sense of the fundamental decencies およびこの忠告を伝える際の父とニックの口調 snobbishly、最後に reserving judgements とその言い換え tolerance だ。どの表現も関連してニックの人物像や価値観を表しているだけに、英語の字面を尊重し辞書と文法に忠実に訳しました、というのでは、『グレート・ギャツビー』を「忠実に」翻訳したことにはな

らないだろう。これは、何も文学作品の翻訳だから特別というわけではなく、おおよそ（時代を経ても誰もが読む価値のある作品という意味で）古典といわれる作品ならば、翻訳に対する心構えは皆同じはずだ。その作品を理解する上で重要となる表現や概念であれば、細心の注意を払い繊細な翻訳が求められてしかるべきであろう。例えば、アダム・スミス『道徳感情論』（*The Theory of Moral Sentiments*, 1759）の中のsympathyやthe impartial spectatorを適当に訳したのでは、18世紀以降のヨーロッパの社会観は適切には理解できないはずだ。

以下、『グレート・ギャツビー』冒頭の理解を基にして、それぞれの表現がどのように翻訳されてきたのか、これまでの翻訳からどのような問題が浮かび上がってくるのか、どのような翻訳が「理解の表現」として相応しいのかを検討していきたい。

まず、hopeとその言い換え表現を取り上げよう。hopeは、ニックにとって途方もない幻想を追い求めるギャツビーの真摯さを顕彰するプラスイメージの言葉であり、このギャツビーの幻想の中にニックは自分が失った何か、つまりアメリカの道徳的再生を聞き取るのだ。だから、hopeやpromisesを辞書の訳語のまま「希望」や「見込み」と訳したのでは、このhopeやpromisesを理解して表現したとは言い難い。以下、表中の強調はいずれも引用者。

	a matter of infinite <u>hope</u>	some heightened sensitivity to the <u>promises</u> of life	an extraordinary gift for <u>hope</u>
角川版	無限に <u>希望</u> を抱くこと	人生の途上に横たわった <u>見込みあり</u> そうなものには敏感に反応を示し	あくまで <u>希望</u> を抱いてやまない、異常な才能
集英社版	無限の <u>希望</u> を生むこと	人生の <u>希望</u> に対する高感度の感受性というか	<u>希望</u> を見いだす非凡な才能
早川版	無限の <u>希望</u> を失わないようにすること	人生のさまざまな <u>約束</u> を感じとる高度な感受性を備えていた	<u>希望</u> を感じとる並はずれた天賦の才能
講談社版	無限の <u>希望</u> を残す	人生の <u>前途</u> に対する高度の感受性	<u>希望</u> に対する異常な才能
旺文社版	無限の <u>希望</u> をのこすこと	その人生の <u>可能性</u> にたいする、敏感な感受性	<u>希望</u> を発見するたぐいまれな才能
中公版	無限に引き延ばされた <u>希望</u> を抱くことにほかならない	人生のいくつかの <u>約束</u> に向けて、ぴったりと照準を合わせることでできるときざまされた感覚	尋常ではない <u>希望</u> を抱かせ
光文社版	どれだけ長い目で見てやれるか	<u>好機</u> を見逃さない感度があった。一万マイル先の揺れをとらえる地震計に近いような高感度だったかもしれない	どこまでも <u>絶望</u> しない才能

集英社版は訳語をすべて「希望」に揃え表層的表現の差を克服しつつ、extraordinaryをプラスイメージの「非凡な」と訳して意味的関連性を保証する。中公版は「希望」「約束」と訳語を変えはしているが、promisesを含む句を「人生のいくつかの約束に向けて、ぴったりと照

準を合わせることでできるときすまされた感覚」と読み解いて、ギャツビーの成功を掴み取る感度の鋭さを表現し、「尋常ではない」で過去をやり直すことができるというギャツビーの幻想を訳す。だが、ここで注目すべきは、光文社版だ。英語の表層的な表現の足枷を軽々と突破し、まさに「理解の表現」としての翻訳を達成している。hopeを「希望」と統一して訳すと不都合が生まれることを自覚しての選択だろう、おかしな連中がニックに勝手に期待するhopeを敢えて「どれだけ長い目で見てやれるか」と、次のtoleranceをも意識した訳を選び、更にギャツビーの幻想の途方もなさを使い表すan extraordinary gift for hopeを「希望」の反意語を使って「どこまでも絶望しない才能」と工夫する。

「理解の表現」としての翻訳という立場からすると、同じ内容を指し示す英語表現の表層的差異を差異のまま訳すのでは、「書物の内容」を理解した翻訳とは言えない。異なる表現ではほぼ同一内容を指示する表現（lexical cohesion）は、個々の作品ごとに意味のネットワークを作り出す。このようなlexical cohesionは言語ごとに異なるため、翻訳でそのまま移行させると必ず意味のずれが生じる。

	all the people in this world haven't had the <u>advantages</u> that you've had	a sense of the <u>fundamental decencies</u>	<u>snobbishly</u>
角川版	ひとなみすぐれた強みをもっている人なんて、めったにいないんだってこと	<u>しん底からにじみでる、</u> <u>といった感じの礼儀作法</u> というもの	気取って
集英社版	みんなおまえと同じように <u>恵まれて</u> <u>いるわけではない</u>	<u>人間としての礼にかなった</u> <u>行為というものにたい</u> <u>する感覚</u>	したり顔に
早川版	自分と同じような <u>有利な条件</u> のもと に育ってきたとはかぎらないのだ	<u>基本的な上品さ</u> を身につけるセンス	紳士気取りな言い方で
講談社版	おまえと同じような <u>長所</u> を持った人間ばかりではない	<u>基本的な礼儀</u> というものに関する感覚	お高くとまった、紳士気取りで
旺文社版	この世の中にいる人が、全部が全部、おまえと同じように <u>有利な立場</u> にいるとはかぎらないこと	<u>基本的な礼儀作法</u> に関するセンスというもの	紳士気取りで
中公版	世の中のすべての人が、おまえのように <u>恵まれた条件</u> を与えられたわけではないのだ	<u>人間の基本的な良識や品位</u>	訳知り顔で
光文社版	この世の中、みんながみんな <u>恵まれて</u> <u>るわけじゃな</u> かろう	どんな <u>品位</u> だって生まれつきだから仕方がない	父の言いぐさではないが

このような表層的差異が何を意味するのかを理解せずに訳すと作品世界が不透明になる箇所が、advantagesとその言い換えa sense of the fundamental decenciesおよびsnobbishlyだろう。定冠詞の付いたthe fundamental decenciesは、同じく定冠詞の付いたthe cardinal virtuesのこ

とであり、ニックの場合それはhonestであることであった（定冠詞の働きから、ニックとアメリカの読者にとってdecenciesやvirtuesが何を指すか自明である）。このhonestは、自分勝手なことをして後始末を他人に押しつける無関心な連中が我が物顔で蠢く1920年代のアメリカにあってprovincial squeamishnessと厄介者扱いされるのだが、アメリカの建国理念を示す重要な概念の一つだ。この建国理念を忘れ誰もが他人に無関心となった時代であって、ニックとその父が敢えてこのことを言挙げするのは、自分たちこそがアメリカの理念を担う選ばれた存在だという自覚とその自覚を取って口にせざるを得ないこの無関心な時代への複雑な思いがあるからであろう。このような理解なしに、英語の表層的差異をそのまま辞書の訳語通りに訳すと、ニックの発言はちぐはぐになる。

誰もが平等に持っているわけではない「品性」「品格」「良心」や「人格」などをニックの父はそれとなくadvantagesという言葉に込め、父の表現をニックはthe fundamental decenciesと言い換えた。そしてこの不平等にしか備わっていない「品性」「品格」「良心」や「人格」の優越意識と責任をsnobbishlyという語にニックは込めた。この意味のネットワークを十分に意識したとき、始めて「理解の表現」としての翻訳が可能となる（中公版と光文社版はすぐれた例と言える）。advantagesは「品位」や「良心」などが不平等にしか分配されていないことを曖昧に言った表現であるから、翻訳もそれとなく「品位」や「良心」のことを言っていると暗示するような表現が望ましく、the fundamental decenciesはもっと直截に「品位」や「良心」といった翻訳が望ましい。それよりも厄介なのが、snobbishlyだ。優越意識と責任感、それにこれを口に出さずには済まない時代の要請を含み込んだ表現を選ぶのは不可能に近い。よって、一つの単語に一つの訳語という考えを捨てて他の方策を執らざるを得ない。

最後に取り上げるreserving judgementsとtoleranceも同じだ。toleranceは辞書には「寛大・寛容」と「忍耐・我慢」という訳語があるからどちらでも良いというのではない。toleranceは、おかしな連中の歪んだ話の相手をさせられることと関連するはずで、そう理解すれば「寛大」ではなく、せめて「我慢」や「忍耐」という訳語が選ばれるに違いない。

	Reserving judgements	tolerance
角川版	判断を差し控えること	こうした寛大なやりかた
集英社版	断定的に割り切ってしまうわないということ	自分の寛容の精神
早川版	批判を控えるということ	そういう寛大さの習慣がある
講談社版	控えめに判断を下すこと	自分なりの寛容の精神
旺文社版	判断を保留するということ	私自身の寛大さ
中公版	判断を保留すること	自分の忍耐心
光文社版	判断を控えるというのは	こんな我慢強さ

以上、簡単に「理解の表現」としての翻訳という立場から、既存の翻訳を確認してきた。ここからどのような問題点が浮かび上がるのか、どのように対処すれば「理解の表現」としての翻訳になりうるのかを、次に検討していきたい。

3. 翻訳が訳すのは「何」か

今、翻訳研究 (Translation Studies) は言語学の応用分野として急速に発展している。語、文、ディスコースの各レベルに分類された研究対象のうち、語あるいは文レベルの分析に集中していた翻訳研究は、1980年代を境に、ディスコースあるいはテキストを対象にし始め、更に文化の翻訳までもその守備範囲としつつある。以下、ディスコースあるいはテキストの翻訳に重点を置いた考え方を参考にして、翻訳が訳すのは「何」かを考えておこう。

まず、現在の翻訳研究がどのような精密さを備えているかを、ジェレミー・マンディ (Jeremy Munday) 『翻訳学入門』 (*Introducing Translation Studies*, 2008) で紹介されているクリスティアンヌ・ノード (Christiane Nord) の翻訳モデルを確認しておく。ノードは、テキスト言語学や談話分析の知見を取り入れた精密な翻訳過程を提示し、翻訳されるテキスト (通例 source text と称し ST と略記され、また翻訳されたテキストは target text で TT と略記される) の分析を重視する。ノードはまず、元のテキストをその言語の読み手が行うような読み取りを再現する翻訳を documentary translation、読み手が翻訳であると意識することなしに読める翻訳を instrumental translation に分類する。

(1) 翻訳依頼

この段階で、テキストが伝えたい意図、書き手や読み手の特定、テキストが読まれる時や場所、書き言葉か話し言葉か、テキストを書いた動機や翻訳する理由などが、翻訳者に伝えられる。

(2) 翻訳されるテキスト (ST) の分析

翻訳技法のうちどの技法を優先するかを決めるために、主題、内容、前提知識 (テキストの書き手読み手が知っていると推定される知識)、テキストの構成、イラストや図版など非言語情報、方言やレジスターおよび専門用語など語彙情報、文構造、リズムなど超分節的特徴などの観点から、翻訳されるテキスト (ST) を分析していく。

(3) 翻訳技法の機能階層

まず、documentary translation にするか instrumental translation にするかを決め、これに応じて翻訳されたテキスト (TT) で重視される要素が明らかになり、文体も決まる。また、実際翻訳する過程で生じる問題は、(2) のテキスト分析に示される階層の低いものから順次解決していく。

このように翻訳者が実際に頭の中で処理している翻訳過程 (言語理解) を再現し、その翻訳過程を言語学的に特定して解決策をストックしていく。このように翻訳過程は言語学のフィルターを通して一般化され分類されていき、この場合はこう処理するといった翻訳ストラテジーがマニュアル化されていく。

翻訳研究の専門家の数だけ専門用語があって煩雑なところは批判もされているが、これまで翻訳家が経験値で処理してきたことが言語学的に解明され、蓄積された翻訳ストラテジーを誰もが利用できるのは好ましいことだし、何より異なる言語を共通の視点から分析することにより各言語の特性が明らかになってきたことは、文章理解をより精緻にするに違いない。だが、マニュアル化が進めば、そのマニュアルとの整合性が文章理解に置き換わり、文章理解の深さや広がりや軽視されることは、受験参考書によく見られる構文とその訳し方の弊害を思い起こせば、明らかだろう。翻訳研究の最良の部分を摂取しながら、文章のより良い理解を目指すこ

とが大切だ。

では、文章のより良い理解とは何か。『グレート・ギャツビー』を翻訳するとき、一人称の訳を決めるにもニックの人物像や価値観を捉える必要があるとして、『グレート・ギャツビー』の冒頭を詳しく読んできた。その読解から、hopeやcarelessnessに込められた意味、advantagesがfundamental decenciesやcardinal virtuesと同じ内容を指していること、snobbishlyに秘められた優越意識と責任観、更にはhonestやinterestが持つ歴史的な厚みなどを取り出し、ニックの価値観を特定してきた。

確かにノードの手順に従って『グレート・ギャツビー』を翻訳作業を進めていけば、より明快に翻訳の文体や訳しにくい箇所を処理していけるだろう。例えば、advantagesがfundamental decenciesやcardinal virtuesと同じ内容を指すことは、lexical cohesionとして処理され翻訳されていくだろう。だが、honestやinterest更にはsnobbishlyなどは、思想史や概念史または1920年代アメリカの歴史的知識が無ければ、辞書的な意味の理解で問題を生じないので辞書的な訳語で翻訳されてしまうのではないか。ノードもテキスト分析の段階で、書き手と読み手の前提知識に注意を喚起しているが、honestやinterestなどの概念史の知識はより専門性を要求される知識だし、snobbishlyに秘められた意味は1920年代のアメリカ史の知識があれば気付ける類のものではない。

古くさい言い方だが、より良い理解の前提は翻訳しようとする作品への思い入れだ。この思い入れによって、作品世界をより知ろうとして色々な表現に引っかかりを持つようになり、その引っかかりが機縁となって前提知識や背景知識を探り理解が進むことになる（このような思い入れを商業翻訳にまで要求するものではないが、商業翻訳に思い入れが不要だからといって、すべての翻訳に思い入れが不要ということは、あってはならない）。

翻訳が訳す「何」かとは、作品をより良く知ろうとして悪戦苦闘した結果、理解し得たことを表現したものだ。この悪戦苦闘の結果の表現には、翻訳者がどこに引っかかったか、なぜそこに引っかかったのか、どう調べ解決したのか、そしてそう翻訳されることによってどう作品全体の理解や相互関連が深まったのか埋め込まれているのだ。

「理解したこと」を翻訳するとき、その「理解の表現」と作品の表現に距離がある場合、翻訳者に解決の方策を示すのが翻訳研究の成果である翻訳ストラテジーであって、決して翻訳ストラテジーを上手に操って翻訳できることが、その作品の理解ではない。翻訳研究によって異なる言語の特性が明らかになり、その成果として蓄積されたものが翻訳ストラテジーだ。言わば、翻訳ストラテジーとは、過去の翻訳家が引っかかり悪戦苦闘しながら解決してきた経験の蓄積だ。その意味で、翻訳ストラテジーとは、それを利用して文章に引っかかりを持ち、文章のより良い理解に資するためのものだ。

最後に、「理解の表現」としての翻訳の例を見ておくことにする。最初にReserving judgements is a matter of infinite hope.の翻訳例を挙げておいた。その中から、この作品をより良く知ろうとした翻訳者たちの良質な悪戦苦闘の過程を共有しておこう（強調は引用者）。

断定的に割り切ってしまうぬということは、無限の希望を生むことになる。（集英社版）
判断を控えるというのは、どれだけ長い目で見てもやれるかということだ。（光文社版）

・「あの人は自分勝手な人」とか「こいつは人のあら探しばかりする」とか、兎角他人をあれやこれやの人物類型に分類して、我々は他者との距離を取るものだ。ところがニックはこのよ

うに他人を断定的に批判することをしない。集英社版は、このようなニックの対人態度を「断定的に割り切ってしまうぬこと」と訳して表そうとしたのだろう。ニックは他人を断定的に批判しない、だからおかしな連中が期待を持ってニックのところによたらに蝸集し、ニックはありきたりの言い回しで飾り立てられた打ち明け話や鬱屈さを気取ったややこしい話を聞かされる羽目になる。このような他人を断定的に批判しない態度が、おかしな連中にニックなら話を聞いてくれるかもしれないと infinite hope を抱だかせることになる。このようなおかしな連中に期待を抱かせることを、光文社版は表層的な英語表現とは一致しない故に誤訳だという批判を覚悟で「どれだけ長い目でみてやれるか」と訳したのだ。

また、成功する人は、後から振り返れば、ほんの些細な出来事をチャンスと捉える感度の良い人であることが多い。some heightened sensitivity to the promises of life とは、ギャツビーの成功を掴み取るその感度の良さのことだ。中公版は、表層的な表現の移し替えではこのような感度の良さを訳しきれないと判断したのだろう、「人生のいくつかの約束に向けて、ぴったりと照準を合わせることでできるときずまされた感覚」と訳者が理解した内容を盛り込んで訳す。また光文社版も同じような判断をし、しかし一文が長くなり表現効果が薄れるのを回避したかったのだろう、「好機を見逃さない感度があった。一万マイル先の揺れをとらえる地震計に近いような高感度だったかもしれない」と二つの文に分けて訳す。

だが、同じ箇所を「人生の前途に対する高度の感受性」や「その人生の可能性に対する、敏感な感受性」のように表層的な表現のまま移し替えた訳が多いのも事実だ。なぜこのような差が生まれるのか。それはこの作品への思い入れあるいはより良く知ろうとする姿勢の差と応えるしかないだろう。翻訳研究によって翻訳ストラテジーが研究され良質な文章理解が可能になった。しかし、いくら良質な翻訳ストラテジーを知っていても、どの箇所どの場面でどの翻訳ストラテジーを使うのかは作品ごとに異なる。これまで生産され今後も無数に生産される作品のこの箇所この場面でこの翻訳ストラテジーを使用せよ、とあらゆる翻訳状況がマニュアル化されること考えられないし、今後もそのようなマニュアル化は不可能であろう。また、翻訳ストラテジーの器用な適用が、文章のより良い理解でもない。翻訳研究の良質な成果を共有できるかどうかは、意外と泥臭い「作品への思い入れ」や「より良く知ろうとする姿勢」だと言える。

注)

- 1) F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (1925; Preface and Notes by Matthew J. Bruccoli, New York: Simon & Schuster, 1995), 6頁。以下、『グレート・ギャツビー』からの引用は本書により、頁数を括弧に入れて本文中に記す。
- 2) 『グレート・ギャツビー』の題について、すこし説明をしておく。角川版は、1957年に『夢淡き青春:グレート・ギャツビー』と出版されていたが、1989年の改版の際『華麗なるギャツビー』に変更された。集英社版は、1957年に研究社から『偉大なギャツビー』として翻訳出版した訳者が、世界文学全集にも同じ題で収録し、1994年にはそれが文庫になった。また、同じ訳者による新潮社文庫(1974年)の題は、『グレート・ギャツビー』である。早川版(1974年)、講談社版(1974年)、旺文社版(1978年)は『華麗なるギャツビー』、中公版(2006)は『グレート・ギャツビー』、光文社版(2009年)は『グレート・ギャツビー』という題でそれぞれ翻訳出版されている。また、著者名に関して、「フィッツジェラルド」としているのは角川版と新潮版で、他は「フィッツジェラルド」となっている。

- 3) 中世の時代に高利貸しとして貶められていた金の貸借による利益が、労働観の変化に伴い interest という語で肯定的に評価されるに至った概念史については、Albert O. Hirschman の *The Passions and the Interests* (1977) を参照のこと。同書は、1985年に法政大学出版局から『情念の政治経済学』(佐々木毅・旦祐介訳)として翻訳されている。
- 4) honest (「自分に嘘をつかないこと」) の概念史については、Lionel Trilling の *Sincerity and Authenticity* (1972) を参照のこと。1989年に法政大学出版局から『「誠実」と「ほんもの」—近代自我の確立と崩壊』(野島秀勝訳)として再刊されている。
- 5) アメリカの理念と言っても公式的な文言があるわけではなく、それどころか無いだけに時代の状況によって色々な解釈を許容してきた。ここでは公約数的なアメリカの理念と理解して、最近のアメリカ孤立主義に懸念を覚えるイギリス人アメリカ研究者ゴッドフリ・ホッジソン (Godfrey Hodgson) のまとめを挙げておくと、それは「自由、民主主義、法の支配、資本主義」への信念となる (10)。

・テキストとしては、以下の版を使用した。

Fitzgerald, F. Scott. (1995) *The Great Gatsby*. Preface and Notes by Matthew Bruccoli. New York: Simon & Schuster.

・翻訳は、以下の版を使用した。

フィッツジェラルド 大貫三郎訳 (1989) 『華麗なるギャツビー』 角川文庫

フィッツジェラルド 野崎孝訳 (1974) 『グレート・ギャツビー』 新潮文庫

フィッツジェラルド 野崎孝訳 (1994) 『偉大なギャツビー』 集英社文庫

F・スコット・フィッツジェラルド 橋本福夫訳 (1974) 『華麗なるギャツビー』 早川文庫

フィッツジェラルド 佐藤亮一訳 (1974) 『華麗なるギャツビー』 講談社文庫

フィッツジェラルド 守屋陽一訳 (1978) 『華麗なるギャツビー』 旺文社文庫

スコット・フィッツジェラルド 村上春樹訳 (2006) 『グレート・ギャツビー』 中央公論新社

フィッツジェラルド 小川高義訳 (2009) 『グレート・ギャツビー』 光文社古典新訳文庫

【参考文献】

Baker, Mona. (1992) *In Other Words: A Coursebook on Translation*, London and New York: Routledge.

Curnutt, Kirk. (2007) *The Cambridge Introduction to F. Scott Fitzgerald*. Cambridge UP.

Hirschman, Albert O. (1977) *The Passions and the Interests: Political Arguments for Capitalism before Its Triumph*. Princeton UP.

Hodgson, Godfrey. (2009) *The Myth of American Exceptionalism*. New Haven: Yale UP.

Lehan, Richard. (1990) *The Great Gatsby*. Boston: Twayne.

Munday, Jeremy. (2008) *Introducing Translation Studies: Theories and Applications*. 2nd Edition. London and New York: Routledge.

Parkinson, Kathleen. (1987) *The Great Gatsby*. Penguin Critical Studies. Penguin Books.

Prigozy, Ruth. (2002) *The Cambridge Companion to F. Scott Fitzgerald*. Cambridge UP.

Prigozy, Ruth. Introduction. (1998) *The Great Gatsby*. Ed. by Ruth Prigozy. Oxford World's Classics.

Tredell, Nicolas. (2007) *Fitzgerald's The Great Gatsby*. London: Continuum.

Trilling, Lionel. (1972) *Sincerity and Authenticity*. Harvard UP.

アレン、F. L. 藤久ミネ訳 (1993) 『オンリー・イエスタデイ 1920年代・アメリカ』 ちくま文庫

ウィリアムズ、レイモンド 椎名美智他訳 (2002) 『完訳キーワード辞典』 平凡社

野村達朗 (1989) 『新書アメリカ合衆国史2 フロンティアと摩天楼』 講談社現代新書